

第 5 回 SPARC Japan セミナー2013

「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来」

2012 年の OA と IR —香港大学と大中華圏

David Palmer

(The University of Hong Kong Libraries)

講演要旨

1990 年代からオープンアクセス (OA) 化への動きは広がりを見せている。香港や中国では、OA は現時点で組織的に重要な課題であり、強い要望もある。今回の講演では香港大学でのナレッジエクスチェンジ・イニシアティブについてご紹介し、OA のマニフェストについて考えてみたいと思う。また、海外のいくつかの組織で現在利用されている、IR が進化したオープンソースのプラットフォームである CRIS (Current Research Information System) についてもお話をしたい。香港、中国、台湾における OA 出版、OA マニフェスト、IR 進捗・発展状況に関する調査もあわせてご紹介する。



David Palmer

香港大学の Digital Strategies & Technical Services の副責任者であり、大学の IR である「The HKU Scholars Hub」(以下、Hub) の主任調査官。学術分野で 23 年以上ものキャリアがあり、2005 年より Hub の運営管理に携わり、システムに関わる諸問題に取り組んできた。彼の尽力により Hub は Current Research Information System (CRIS) へと進化を遂げる。Hong Kong Open Access Committee の設立メンバーでもあり、2009 年 11 月のオープンアクセスに関するベルリン宣言への香港大学の署名にも貢献した。

中国は広大で人口も多い国ですが、私が所属する香港大学から話を始めます。香港大学の機関リポジトリ (IR) は、Hong Kong U Scholars Hub といいます。オープンアクセスを目指し 2005 年に刊行文献の収集を始めました。しかし、教員はおおむねこの IR を無視していました。大学は 2009 年、Knowledge Exchange という新たな取り組みを開始しました。それによって IR は新たな資金を獲得し、教員の新たな関心を集めました。

Knowledge Exchange と Knowledge Transfer

Knowledge Exchange (知識交換) に先立ち、Knowledge Transfer (知識移転) と呼ばれる取り組みが

実施されました。Knowledge Transfer の考え方によれば、社会は企業、政府、大学の 3 部門に分けられます。大学は三つ目のセクターといわれ、現在の大学には教育、研究に加え、知識移転または知識交換という第三の使命があります。

世界には、Knowledge Exchange や Knowledge Transfer、Knowledge Translation に取り組んでいる大学や機関が数多く存在します。カナダ保健研究所は Knowledge Transfer ポリシーを策定しています。このポリシーがあるため、彼らは研究成果の登録義務化を含め、新たなオープンアクセスポリシーも策定しています。

香港には八つの大学があり、政府の資金援助を受けています。資金を提供する政府機関は、大学助成金審

議会（University Grants Council : UGC）です。姉妹機関の研究助成金審議会（Research Grants Council）は、香港の研究を支援する主な助成機関です。8 大学全てが UGC のポリシーに基づき Knowledge Transfer を進めています。香港大学のみ、取り組みの名称を Knowledge Exchange に変更しました。Knowledge exchange をオープンアクセス実施の理由としているのは、香港大学だけです。

香港大学の Knowledge Exchange Office は、数多くの提案や取り組みに資金を提供しています。例えば工学部は、ハイテクサイバー犯罪撲滅に向けた取り組みに資金提供を受け、地域社会と協力してこの活動を実施しました。こうしたプロジェクト以外に図書館にも資金を提供しています。IR 開発や OA に関する活動にも、資金が提供されました。

Hub

香港大学のリポジトリは刊行文献のみを収集していたので、これを変える必要がありました。Knowledge exchange を行うには、異なる研究対象や研究の多様な側面に関する情報の収集・開示に取り組みねばなりません。そこで IR から CRIS に名称を変更しました。一般に IR は、刊行文献収集とオープンアクセスを目的とします（図 1）。他方で CRIS は全ての研究分野が対象になります。CRIS の主な優先課題と重要な機能は、研究活動の管理・分析です。大学経営陣に情報を提供し、資金配分等に関する意思決定を支援し

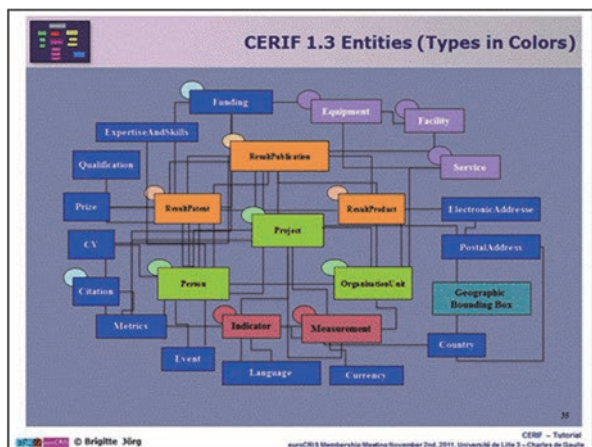
ます。これが、文献の OA 化を進める十分な根拠にもなります。

DSpace の開発を進めるため、私たちはイタリアの企業 CINECA をパートナーに選びました。DSpace は文献の関係性を示す表を持っていますが、さらに研究者、助成金、教員、学部等に関する情報を作成しました。DSpace 上に、DSpace-CRIS という追加モジュールを開発しました。これはオープンソースで、ダウンロード可能です。これまでに多くの人がこのモジュールを試験的に使用しており、今年はイタリアをはじめ、他の大学も DSpace-CRIS を使い始めるでしょう。EuroCRIS は欧州で展開されている動きで、現在、公式 IR として DSpace-CRISIS を採用しています。

Hong Kong U Scholars Hub ウェブサイトのトップメニューをご覧ください（図 2）。研究者、スタッフ、学部、刊行物、論文、助成金、特許などで検索が可能です。

助成金（プロジェクト）

図 3 は Hong Kong U Scholars Hub の画面例で、ペリス教授という学内トップ研究者に交付された助成金を表示しています。この教授は、SARS や鳥インフルエンザの原因ウイルスを発見した研究者です。彼が 760 万香港ドル、つまり約 100 万米ドル相当の助成金を受けたことが分かります。下にスクロールすると、助成金の成果として 117 本の論文が執筆されたことが分かります（図 4）。一つの助成が、117 本の論文につ



（図 1）



（図 2）

なりました。

以上から、次の 2 点を指摘したいと思います。1 点目は、全情報が CRIS に掲載され、リポジトリの情報全てが統合されると、個々の研究の背景を把握できます。2 点目として、Google で検索した人がどこかのページをクリックして、この助成金情報にたどり着くと、刊行物へのリンクも閲覧できます。全てが統合され相互にリンクされると、アクセスポイントが増えます。研究結果を簡単に探し出せ、様々な関連情報に非常に容易にたどり着けます。

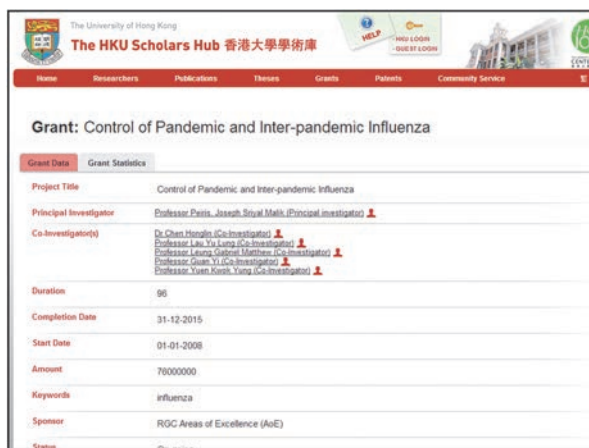
ここに示す Hub の概念図を見れば、Scopus や Web of Science 等の外部データや、香港大学レジストリ等の内部データといった多くの情報源からデータを収集していることが分かります (図 5)。内外から集めたデータを Hub にアップロードした後、図書館員が編集してデータの修正や追加を行います。以降も個人単

位、学部単位でログインし、データの編集・削除・追加・修正が可能です。全員の協力による編集・統合を経て、単なる部分の集合よりはるかに大きな、「集団的知性」として知られるデジタルエコシステムが生まれます。

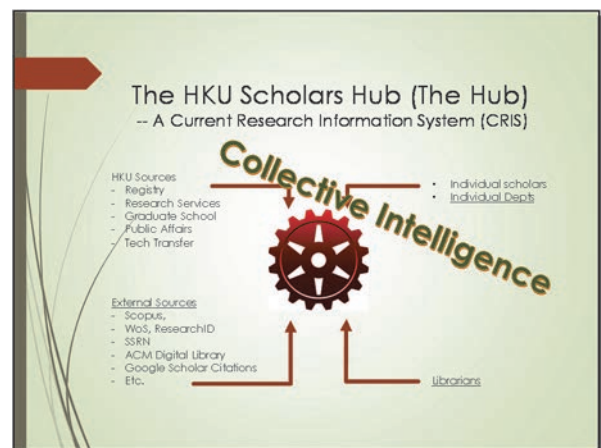
香港大学の OA 出版

香港大学 Knowledge Exchange Office は、他の関連プロジェクトにも資金を提供しています。OA 出版と ORCID も助成しており、出版社と ORCID 対応に関し契約を交わしています。今年は香港の大学図書館全てが SCOAP に参加してくれるよう願っています。

ORCID に関しては、香港大学図書館は職員一人ひとりに ORCID アカウントと識別番号を付与する予定です。これは、Hub に掲載された私のプロフィールページです (図 6)。私の ORCID ID と ORCID へのリン



(図 3)



(図 5)

HKU Project Code	AoE/M-1208
Amount	76000000
Grant Type	Areas of Excellence Scheme
Completion Date	31-12-2015
Keywords	influenza
Sponsor	RGC Areas of Excellence (AoE)
Duration	96
Funding Year	2007/2008

Type	Title	Authors	Year	Views
Publication	A secondary study, acid-binding site on influenza virus hemagglutinin: fact or fiction?	Lai, JCC, Garcia, JH, Deyan, JC, Bohn, R, Madge, PG, Rowe, FJ, Nichols, JH, Parris, JS, Haselhorst, T, von Kitzburg, M	2012	128
Publication	Situational awareness of influenza activity based on multiple streams of surveillance data using multivariate dynamic linear model	Lai, JH, Cheng, CKY, Ip, DKY, Cowling, BJ	2012	98
Publication	Phenotypic and functional characterization of human H5N1 cell subsets in response to influenza A viruses	Qin, G, Liu, Y, Zheng, J, Xiang, Z, Ip, DKY, Malik Peiris, JS, Lai, JH, Tsui, W	2012	158
Publication	Detection of highly pathogenic influenza and pandemic influenza virus in formalin fixed tissues by immunohistochemical methods	Fung, K, Van Poucke, S, Parris, JS, Poon, LLM, So, LKY, Yen, H	2012	159
Publication	Optimal design of intervention studies to	Kock, B, Nishihara, H, Cowling, BJ	2012	185

(図 4)



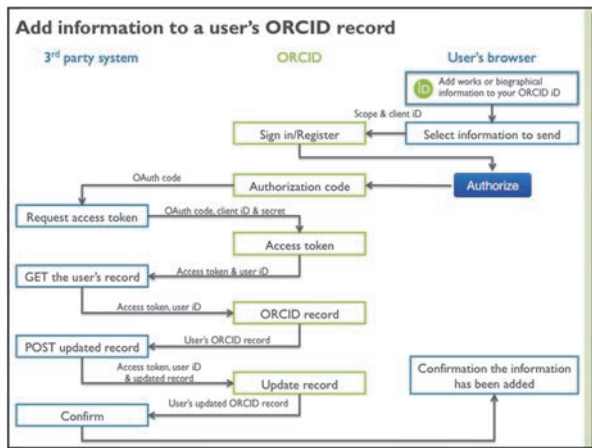
(図 6)

ク先 URL を矢印で示しています。ORCID は、個人の識別に関する問題の解決を目指すものです。一人の人が色々な名前を使っていたり、逆に同じ名前の人が何人もいたらどうなるでしょう。その人を検索しようとすると、どのアカウントが正しいか分からないという問題が生じます。識別情報の曖昧さが問題であり、これは論文著者に限らず、全ての専門職、発明家、主任研究員、コンサルタント等に言えることです。個人の評価を考える時、この問題が表面化します。個人の識別に問題があると、その人は折角の機会を失います。

しかし、これは個人の問題にとどまらず、機関の問題でもあります。ミスや何らかの理由で引用回数が低い場合、その機関のランキングが低下します。それが、政府からの助成金減額やその他の影響につながるおそれもあります。そのため機関には、この問題に対処すべき十分な根拠があるのです。

香港大学は現在、教授陣一人ひとりの ORCID レコード作成に取り組んでいます。教授陣は自分の意思でオプトアウトしてもよいし、クリックして ORCID レコード作成を選ぶこともできます。何もしなければ、図書館が教授のために ORCID レコードを作成します。手順については、図書館が ORCID レコードを作成後に本人にメールを送付し、本人に対し異議申立や変更、ORCID レコードの非開示等の措置をとる機会を提供します（図 7）。本人が何もしなければ、10 日後に公開されます。

香港大学の OA に関する活動を振り返ると、2000



(図 7)

年に大学院生に対し電子論文の登録を義務づけ、現在 22,000 本がオンライン化されています。2010 年には、図書館職員向けの OA ポリシーを策定しました。2011 年に大学が知的財産権に関するポリシーを作成しました。ただ香港大学の教授陣は、おおむねこの方針を無視しています。

今後は、これらの OA 論文をリポジトリに保管し研究者評価制度の一部に組み込むことを計画しています。まもなく香港大学の学長が交代し、来月英国ブリストル大学から新学長が着任します。新学長が来れば状況が改善すると期待されます。副学長は、香港大学での仕組みを機能させるには、UGC と RGC に相談し、香港の 8 大学全て同じ対応をする方針をとる必要があると述べています。すなわち、オープンアクセスによる情報管理を教員評価に取り入れることになります。

大中華圏での調査

大中華圏での IR、OA 義務化、OA 出版について説明します。香港では 8 大学それぞれが機関リポジトリを保有しています。中央リポジトリは HKIR と呼ばれ、メタデータを収集し 8 大学全てに共通の検索エンジンを提供しています。

マカオにも機関リポジトリがあり、DSpace を使用して約 3,000 本の論文を収載しています。しかし私が聞いた限りでは、OA 出版を試験的に実施しているのは香港大学だけです。

OA 義務化に関して、香港大学には知的財産権に關



(図 8)

する方針文書があります。香港理工大学は 2010 年にマンドートを設定しましたが、教授陣はおおむねこれを無視しているそうです。台湾には Taiwan Academic IR (TAIR) という組織があり、教育部から 131 の機関リポジトリを委託されています。TAIR は、全 IR に共通の検索エンジンを提供しています。興味深いことに TAIR は非常に活動的な組織で、多くの会議、セミナー、ワークショップを開催しています。TAIR のウェブサイトには、傘下のリポジトリ一覧が掲載されています（図 8）。私の友人は国立台湾大学の副館長ですが、TAIR で精力的に活動しています。彼によれば、台湾には OA マンドートはないそうですが、OA 出版については分かりません。

中国には中国学術リポジトリ機構 (China Academic IR group) があり、25 の大学図書館から構成されます。中国政府の助成を受けた中国高等教育文献保障系統 (CALIS) の委託を受け、IR を運営しています。北京大学が主導し、全てのメタデータに共通の検索エンジンを提供しています。中国科学院国家科学図書館は、OA と IR に非常に意欲的、積極的です。

趙曉林教授が 9 月に実施したプレゼンによると、中国の IR の 72% は中国科学院に属し、17% は香港、11% は中国の他大学に属しています（図 9）。ここ 2～3 年、中国科学院はオープンアクセス・ウィークを開催しています。ゲスト講演者を招き、学生・教授によるセミナーを企画し、中国 IR 推進機関も設置しました。この推進機関は 9 月に雲南省で、第 1 回中国 IR

会議を開催しました。私も参加しましたが非常に有意義なもので、多くの講演者が出席し、誰もが非常に熱心でした。新たなアイデアを学び意見を交換する、格好の機会になりました。

OA 出版については、中国科学院の知人に聞いたところ、科学院のみが出版社と契約交渉を行っています。当然、BioMed Central、Public Library of Science とは話を進めています。興味深いことに、中国科学院をはじめ中国国内の多くの大学は、研究者が APC の支払いに助成金を使用するのを認めているそうです。

何人かに話を聞きましたが、中国では OA 義務化は 1 件しか見当たりませんでした。張曉林教授が中国科学院国家科学図書館でマンドートを定めており、図書館職員と大学院生が対象です。



(図 9)